

## はじめに

都留市教育委員会ならびに文化財審議会は「都留市歳時記」として二年をかけ、市内の年中行事を調べてきました。

その結果、年中行事として残っているものは、そのほとんどが県内各地に何らかの形で継承されていて、特に都留市だけに見られる独得の風習と行事といえるものはほとんどないことがわかりました。

そうした中で、大名行列で知られる「八朔祭」だけは、県下に類をみない祭りといえるでしょう。また、どこにもある獅子舞ですが、郡内における獅子舞の発祥は都留市で、その数も県下に稀にみる多数地域で行なわれていることがわかりました。

そこで都留市の祭りを特徴づけているものとして八朔祭及び獅子舞について取りあげ、特に解説を記すこととしました。

なお、八朔祭については、それを有名にしてきたものとして大名行列と各町から出される屋台の競演とがあったわけですから、大名行列と、いま残されている屋台の飾り幕とに焦点をあてて紹介したいと思います。

## 八 朔 祭

### 概 要

都留市を代表するお祭りといえば何といっても生出神社の例祭です。都留市の人はこのお祭りを「おはっさく」と呼んでいます。

八朔とは旧暦の八月ついたちのことです。地方によって八朔節句、タノミ節句、馬節句などと呼んでいて、節分や雛祭り、端午の節句、七夕などと同様に特定の神社のお祭りではなく、農村の民間行事の一つです。

8月1日といえば夏の盛りようですが、旧暦にあてはめると例えば昭和63年では9月11日となります。秋蒔き物も終り稲の稔り間近のこの日、稲作最後の頼み行事が行なわれるわけがよくわかります。

8月1日を祝う行事は古くから行なわれていたらしく、中世の書物にも出てきますが、この祝の日を神社の祭日としたのが都留市の八朔祭りです。

生出神社はもと諏訪明神といいました。農業の神様です。秋元侯が領主のとき、侯の信仰を得て生出神社と名を変えましたが、祭神が変わったわけではなく諏訪大社と同じく建御名方命と八坂刀売命とを祀る神社です。本社の諏訪大社では5月5日に祭が行なわれますが、この地方で旧暦5月初旬だと、いまの6月半ばとなり、田植と重なってお祭りどころではありません。そこで、丹精した稲の稔りを目前としながら、水見もいらず秋の蒔物も終って、比較的農閑期となり、台風だけが心配という中で祭りを行ない、神に五穀の豊穰を祈願する祭日日を「たのみ節句」にあたる八月の朔日にあてたものでしょう。

一説に家康が江戸城に入ったのが天正13年8月1日だからというのがありますが、この頃は豊臣氏の領土であったこと、祭神が東照公なら別ですが農業の神であること、徳川氏に敬意を払うならもっと数多くの神社が8月1日を祭日としなければならないことなど考えると、家康説はうなずけません。

生出神社の例祭が都留市だけでなく県下に名を知られた祭りとなっている理由は風流(フリュウ)にあるといえましょう。儀式そのものが本来の祭ですが、儀式以外の舞・神楽・神輿・山車・大名行列などは祭りを盛りあげるものとして考えられたもので、これを民俗学専門語では「風流」と書いて「ふりゅう」と読んだり言ったりします。

八朔祭は単に氏子構成が大きいだけでなく、町から町へと引き継いでいくけんらん豪華な大神輿の巡幸があり、その先導として県下に数少ない大名行列があり、また各町競って出した屋台での芸能披露があったり、見るだけの祭りではなく、町民みんなが参加できる様々な「風流」があって祭り気分を大いに盛りあげてきたのです。

いま、神輿の巡幸もなく、屋台での諸芸能も見られなくなってしまい、参加する祭りから見る祭りになってしまったけれど、大名行列だけは都留市独得の風流として命脈をつなぎ、伝統的祭礼として広く県下各地から見物客を集める盛大な祭りとして受継がれています。

八朔祭に参加するのは生出神社を氏神とする下天神町、早馬町、新町、仲町、下町、高尾町、姥沢、四日市場で、以前は新明町、新井、深田、中島も入っていましたが、江戸時代末には上町、横町なども加わっていた記録があります。

祭りの執行は各町の氏子代表による合同協議で行なわれますが、執行の最高機関を惣行司といって年番制となっています。惣行司をつとめる町は早馬町、新町、仲町、下町、高尾町の五町です。惣行司となった町が中心となって、その年の祭りの一切をとりしきります。各町にも行司当番があつて、町の飾り、祭費の徴収、儀式の参加等を行ないます。神輿の巡行や

屋台が出されるときは、担ぎ手の手配や屋台での催し物などについての指揮やら神輿巡行の引き継ぎ、休憩所での接待などにあたりました。

年番となった惣行司のきめる一番大切なことは、その年の祭りを本祭りとするか居祭りとするかです。それによって準備の日程や内容や費用や人手の手配に大きな違いがあるからです。本祭りとは、神楽巡行を行うということで、居祭りとは神輿は出すだけで巡行は行なわれません。本祭りとするか居祭りとするかは、農作や一般景気、居祭りの続き具合で決められました。本祭りのときは各町から屋台が出されるのが恒例でした。また大名行列が出されるのも本祭りのときですが、本祭りだからといって必ずしも大名行列が出るというわけではなく、付祭りとして条件のよい時に出されました。

居祭りのときは各町の氏子代表が神社に参列して祭礼儀式を行うだけで各町独自に出す屋台なども自然に小規模となるか全く行なわれなくなります。当然、大名行列も居祭りの年に行なわれるということはありませんでした。

いまは交通事情のために神輿の巡行は中止されたままになっていて、大手通りに御旅所が置かれて神輿が展示されるだけとなり、大名行列だけが実行委員会の手で毎年行なわれています。神輿巡行による居祭りとか本祭りの区別はなくなり、形の上では常に居祭りでありながら本祭りの年に限ってたまたま行なわれる付祭りの大名行列が恒例化しているという変則な形になっております。

お祭りは前日の8月31日からはじまります。宮元氏子によって生出神社には祭り幕や幟が立てられ、総行司氏子によって神輿が大手通りお旅所に運び出され、町並には各町当番組によって注連縄が張り渡され、軒には家毎に提灯がつるされます。各町には会所が設けられ、会所幕が張られ、生出大明神の軸がかけられ、鏡餅がそなえられます。会所をはじめ旧家では屏風が出されて座敷が飾られるので、屏風祭りとも呼ばれたとのことでした。

昔は一日の丑の刻になると惣行司から太鼓が打ち出され町を廻って歩きました。これを一番太鼓といい、つづいて二番太鼓が繰り出され、夜のとばりがあけるころ三番太鼓となります。三番太鼓では「御支度・御支度」と知らせて歩くのがしきたりでした。

総行司・各町の行司が出そうと神輿を奉じて生出神社に行き祭りの儀式が行なわれるのです。このとき大名行列が行なわれなくても赤熊だけは加わり、これがないと一切の行事は進められないという権威を示すものでした。

お抜・祝詞の奏上等の神事が進行するなかで、巫子の浦安の舞や、四日市場氏子の獅子舞が奉納され、神輿に御霊が移されると、大名行列の先導

で生出神社から獅子舞を舞いながら神輿の巡行がはじまるのです。

大名行列については後述するので略しますが神輿は町から町へと受け継がれていきます。神輿が通ってしまうとお祭りが行ってしまうといて、各町ともできるだけ長く自分の町へとどめておきたくて、自分の町を丁寧に練ろうとしては惣行司の世話を焼かせるのが常でした。この間、各町の会所では獅子舞が行なわれ、神輿納めの下天神町で浦安の舞が奉納されると巡行も行列も終りとなります。

各町競の屋台と、大神社や東漸寺の広場で行なわれる見世物は近郷近在から多くの人を集め、東漸寺から上谷へ向って国道は両側ぎっしりと露店商でうまり、夜になると露店に集まる人々で押すな押すなの盛況となったものです。

いまは、こうしたしきたりや祭りの様子もすっかり変わりました。太鼓が打ち鳴らされることもなく、きめられた時間集まるようになり、一時神輿は若衆の確保が難しいことから子供でも曳ける曳神輿に変えられたものの、間もなく大手通りに飾られるだけとなり、いまでは御霊移しさえ行なわれなくなり、獅子舞も神事として神殿とお旅所で奉納されるだけ、屋台はとうに使用不能となり、子供や婦人の踊りなどでつないできましたが、それも絶えています。わずかに大名行列だけが類例のない風流として保存意欲強く、実行委員会の手を借りて巡幸路も大巾に変えられてはいますが、続けられています。

屋台は全く見られなくなってから久しいものですが、屋台飾りとなった後幕は現存し、県内はもとより、関東周辺では見られない豪華な幕であり、都留市が他にほこれる文化財ですから、祭りに深く関係した飾り幕についてはこの機会に項を改めて記しましょう。

サーカス類の見世物は全くなり、露天に並ぶ店まで変わってきました。露店は国道から高尾町通りへと移り、カヤのタンキリ、オデン、義士焼、バナナ・ナシのたたき売り、海ほうずき、金魚すくい、うなぎつり、ヒヨコ、砂絵、まわり灯籠、アイスキャンデーなどは、タコ焼き、焼きそば、おこのみ焼、タイ焼、焼もろこし、やきイカ、オモチャなどにかわり、風船やお面などがわずかに内容的に同じだといえるくらいです。

内藤恭義